（大正十四年八月十三日第三種郵便物認可）
昭和七年四月十日印刷納本
昭和七年四月十二日發行
（毎月一回十二日發行）
第十一卷第四號

眞生

第十一卷　四月號

□同じ春でも月によつて氣候が違い、景色も異なるがその中でも四月と云ふ春は人の心に非常に暖さと温らぎとを感ぜしむる時であります。

□その上に我が日本では丁度學期の初にも當り、殊に學校などに關係してゐる人は此の月位自分の心に大きな變化を與える時はないかも知れません。

□乍然それにも增して私共の心に更に大なる心の變化を與えるものは四月八日の釋尊の出生と同七日の法然上人の誕生の記念日であります。

□四月八日釋尊の誕生として近年全國的に之を記念するやうになりました事は信仰增進の策勵上から申しても非常に結構なことであり、四月七日法然上人の御生れの日として、淨土敎に大きな記念となつてゐることはまた限りない喜びの事であります。

□乍然世の多くの人達は此の春の日の麗かさも知らず、此の月の神聖なる記念日も忘れて、肉慾と財慾の努隷として、日夜その爲めに本當の晴天を見ることのできないのではありますまいか。

□釋尊が此の世に出でられて已に二千五百年、それにもかゝはらず多くの人々は未だ釋尊の見られたやうな本當の世界を見る事ができずに居ります。

□そしてまた、法然上人の出てられて八百年、世人はそれも亦何の爲めの出現かを眞に知る人がないやうであります。心こゝに在らざれば見れども見えず、聞けども聞えずと云ふことがありますが、やはり此の事を云つたものでせう。

□願くは私共の心にも春の日のうらゝかさを來たし、釋尊や法然上人の眺められたやうな靈の光にまでその信仰の眼を開くべきではありますまいか。今日の四月は單なる四月ではないのであります。（念）

目次

眞我の發見　念
人生の行路　土屋觀道
人生の眞意義（其の二）　土屋觀道述　山田恢順記
支部通信
其の他

世界と平和

□世の中に自己を愛し國を愛すると云ふことは普通決してとがむべき事ではありません。此の意味に於て、世界の各國が各々自分の事を思い、自分の國を思ふて色々の事を爲す事は亦止むを得ぬ事であります。

□乍然それだからと云つて、自分の國さへよければ他の國はどうなつてもよい云ふ事はあまりにも利己的であつて、之を外から見れば非常に見にくい事であります。之はお互の國際間にあつてもよく見ることでありますが之はお互に謹しむべき事でありませう。

□然に今日の國際關係はいかゞでありませう。果して何の國が本當に國際の信義を守つてゐる國がありませう、私共は玆に大に諸外國のそれに對する態度を監視すべきであります。

□之は今に始つた事ではありませんが、今日の國際聯盟なるものが、果してどれだけの國際信義を重してゐるかを考へて見れば、そこには甚だ心細いものがあります。殊にそれは今度の滿蒙問題や上海事件で一層明にその事實を暴露せられたやうであります。

□英國の態度や米國の態度を御覽なさい、佛國や伊國もそこに至れば同じであります。その他の國も一として、眞に自國を忘れて、世界人類の爲めに、どれだけの正義を主張しつゝあるでありませう。

□然ば日本が日本の事を思ひ、支那が支那の事を思ふのはお互に國家存亡の時亦止むを得ぬ事でありませう。今のところ今日の國際聯盟は全く外面に道德を裝ふてゐるがその實は各自各ていのよい利己主義の集りに過ぎません。從つて、その名を聯盟の規約に依るも、その實は各自々國の利益擁護の集團に過ぎません。

□此の意味からすれば本當の平和は各人の自覺に待つ眞實の宗教のみがたゞ一つ始めて、自他を統一する道であります。（念）

眞我の發見

□或る人は此の躰を自分だと思つてゐる人があります。乍然此の躰は五蘊假和合と申して、因緣によつて出來たものにほかなりません。だから此の躰は壽命が盡きれば再びもとの物質に解散してしまいます。

□さうでなくても、此の躰は日夜に變化して止まないもの、生理學では七年もすれば骨の髓まで新しく變つてしまうと云ふことです。すると七年前の私の身は今日では全く無いことになるのです。

□或る人は此の心が自分だと云ふ人があります。乍然この心とはどの心を指すのでせう。此の心と云ふ程のものが個定して私共にあるでせうか。心の安ぐ暇もないと云ふやうな心もあるがそれも嚴密に考察すると心が不安なのか自分が不安なのか自分と心とは同じが別か。

□私の心とか、誰それの心と云ふ場合には心が直にその人を指してゐるのではありません。その時の心は所謂因緣によつて常に變化生滅して暫くも止まることが無いのであります。然ば此の心も亦本當の自分と云ふことはできません。

□乍然、私の躰と云い、私の心と云ふからには此の躰や心が私にないにしても、それが私に關係を持つてゐるには違いないでせう。然らば本當の私はどれでせう。

□或る人は靈魂が私である、「たましい」が私であると云ふ人もあります。乍然之も亦、私の靈魂私の「たましい」と云はれるべきもので、本當の私ではありません。

□友よ、本當の私はどれでせう。本當の私をまだ知らないでゐはしませんか。その爲めに本當の自分が色々の心や肉慾の爲めに常に左右せられてゐるのです。（念）

人生の行路

（名古屋座談會、昭和七年三月廿日、夜、崇德寺に於て）

土屋觀道

一

土屋「昔雀離寺と云ふ寺に一人の佛の悟を得た老比丘がありました。或る日一人の沙彌（在家の信者）を伴につれて城下を見物して歩いた事があります。沙彌は比丘の衣鉢が重いので、それを自分に擔いて比丘の後からついて行きました。

すると、沙彌はその衣鉢が重いので、「此の世の中に生れた上は誰だつて、多少の苦勞の無いものはない。然し苦勞なくして行けるものなら之に越した事はない。自分も老師のやうになつて行けるものならさうなりたいものだなあ」と思ふのでした。「しかし、老師は他心通を得てゐられると云ふから、己に自分がこんなことを考へてゐることを御存じかも知れぬ」と思ふと。老比丘は後をふり向いて。「お前、その衣鉢をこちらに持つて來なさい。そして私の先きに立つて行きなさい」と云つて、その荷を受けとり、沙彌をしてその前に立たせるのでした。

沙彌は衣鉢を持たなくなつたので、非常に身輕になりました。乍然暫くすると彼れは思ふのでした。菩薩と云ふものはその修行が大へんときく、人の求めには何んでも應じねばならぬと云ふことだ。眼球を求められれば眼球を與え、命を求められれば命をも與えねばならぬと聞く、そんな事はとてもこんな私には出來ることでない。すると自分はやつぱり前のやうに自分で衣鉢を擔ぐのが本當か知らん」と思ふのでした。

すると老丘は後から沙彌を呼びとめました。そして「お前、やつぱり此の荷を持て」と云つて、その衣鉢を沙彌に持たせ、「お前は後からついて來い」と云つて、老師が先きに立つのでした。

斯くの如くする事三度、沙彌は遂に意を決して、自らその衣鉢を擔いで、比丘のあとを行くのでした。

以上は或る譬喩經の一部のお話です。皆さんからの覆藏のない御所感を聞かして頂きたい。それについてはたゞ皆樣が今の話について御感じになつたまゝの所をそのまゝに出して頂くと云ふことです。あとからあとからと出て來る皆樣の御感じを自分の感じとして話して頂いては困るのですよ。」

二

土屋「では大内さん、あなたの御感から聞かして頂きませう。久々で御目にかゝりました、覆藏ないところを聞かして下さい。」氏はもと無政府主義の一人。今も尙そのことを一つの眞理として主張せられる一人である。昨年七月信州の唐澤の三昧會以來、念佛の道士となつた一人であるが、本日久々で御目にかゝつた人である。

大内「老師と沙彌との地位が度々入れかはつた事は此の社會の巡還を意味したものです。そして、現代は恰も沙彌が老比丘に交代を願つてゐるところです。ところが現代の老比丘は仲々沙彌の重荷を代つて持つやうなことはありません。その點が少々此の話と違ふやうです。」

土屋「なるほど、面白い見方ですね。今日の老比丘が上流階級と云ふのですね。たゞ佛の悟を得てゐ

ないところが殘念ですね。此の分で行くと沙彌の方で衣鉢を老比丘に投げつけないとも限りませんね。あなたは此の中のどちらに與るのでせう。少々衣鉢が重すぎはしませんか。……澤田さん、あなたはいかが、御感じでしたか。」

澤田氏は三河在の人、此の一月から名古屋までわざわざ道を求めて御出る方である。

澤田「私は重荷を煩惱の事だと思いました。そして、吾々は此の重荷を擔つて人生を渡るものである。時々私達も老比丘のやうに身輕るならう思ふので煩惱を止めて見るが修養が足らぬので反つてそれの爲めに苦しいのです。だからやつぱり私達は、この煩惱を持ち乍ら念佛の中に生活するより外に仕方のないものだと云ふことを敎えられたものだと感じました。」

土屋「重荷を煩惱だと御感じになつたのは面白いですね。而も煩惱の重荷はだれでも取り捨てたいものですが、さてそれを全々取つて見ると仲々それにも亦心の落ちつかぬものです。そこが凡夫であるからでせう。かと云つて煩惱の重荷の中にゐて喜んでも居れず、それを重いと知り乍ら之を擔つて老師のあとをついて行くのが面白いですね。」

澤田「つまり、念佛の信仰がそれなのでせう。」

土屋「いかにもそれに違いない。全く之は淨土敎の信仰ですね。では土屋の奥樣あなたはどうお感じになりました。」

氏は大阪の人、昨年の夏、日華周遊團に加つて知り合になつた寫眞部の土屋氏の奥樣である。御子息と共に此の日名古屋に來られ、私が此地にゐることを知られて御訪ねになつた方である。

奥方「私は老比丘の御生活と一沙彌の生活とを比べて、つくづく御弟子の心を思はせられました。つまるところ沙彌の心の迷つてゐる姿を示したものがと思いました。自分の爲すべきことが判つきりとしないから色々なことを思ふのです。」

土屋「なるほど、すると弟子の心の色々と變るのをこゝに示して、私共の心の迷いを示したのですね。あなたはいかゞですか」土屋氏の御子息を指す。

豐氏「弟子の姿はそのまゝ私共の心の迷いを現はしたものかと思います。實際此の世の中に働いて行く間には此のお弟子のやうな心が私共によく起つて來るのを感じます。會社などでも自分より上の人が何もせないでタバコでもふかしてゐられると非常にしやくに障つて來ることがあります。かと云つて自分がその地位に置かれると何もできないのですが。」

土屋「それはあなたばかりではありますまい。恐く今日の青年は誰でもが持つ氣持ちですはね。するとさうした氣持ちと云ふものはやはり三千年の昔にもあつたことでせうかね。では次のお方はいかゞです。」

某甲「私は別に大した事は感じませんでした。こんな考へは世間にもあり勝ちの事だ位に感じたことです。どうもまだ修養が足りないので何の感じも仕得ないのです。」

土屋「さう殊更に御遠慮なさる必要もありますまい、思つたまゝを言つて頂けばそれでよいのです。」

某女「私もやはりこなた（某甲）と同じやうな感じでした。然し私の心は丸でお弟子そのものです。現在の仕事に滿足することができないのですが、かと云つて他の仕事をして見てもやはりだめですし、やはり從來の仕事を重くてもやつて行くより仕方がないのでせう。」

丙女「私の心がそのお弟子そつくりです。あまり主人から重い仕事を命せられると腹が立つて仕やうがありません。かと云つて自分でそれをやらないと又心苦いので前の仕事をやるのです。」

二三の人くすくすと笑ふ者あり。

三

丁女「私は、皆さんと全く少し違つた考へで聞いて居りました。それは當るか當らぬか知れませんが、お師匠樣のやり方に心から感心してゐたのです。つまりお弟子の心を知り拔いて、自ら弟子の荷物まで持つてやつてそうして、そのお弟子をその道に御指導下さるのが尊く感じられました。」

土屋「之は亦面白い、今までの人は皆が皆までお弟子の方ばかりについて御考へのやうでしたが、あなたはそれと全く反對にお師匠樣の方に御注意でしたね。成る程ものは見やうと云ふが色々見やうもあるものですね。」

「成る程さうも見える」と云ふもの二三あり、一同大に喜び、一坐非常に賑ふ。

丁女「全く師匠なればこそと、心から有難く感謝いたされました。その老比丘の心は全く如來樣の心でせう。」

棚橋「私はお弟子が自分の本分を自覺せないからそんな事になると思いました。人には各々自分の爲すべき本分がある、それを自分で自覺しないから、人のことのみうらやんでその心が落ち付かぬかと思いました。」

土屋「そこにも一理あるやうです。自己の本分を自覺しないところに此のお弟子のもだへがあつたのですね。では伊藤さんはいかゞですか。」

伊藤「私はお弟子が自分の爲すべき責任を自覺したのだと感じました。尤も初にはそれが判らなかつたが、師匠の先に自分が立たせられて、それが初めて自分の居るべきところでないと判つたのです。お弟子は三度目に本當の自分が判つたのでせう。」

土屋「つまり自分でやつて見て初めてその位でない事を知つたのですね。それも一度ではまだ判らず、三度もくり返して初めて、それが判つたと云ふのも面白い。要するに體驗の自覺ですね。河西さんあなたはどうです。」

河西「私はまたお弟子が最後にもとの仕事に立ち歸つて御師匠樣のあとにおさまつた事を面白く感じました。人は誰として向上の心のないものはない。だからいつまでも師匠の後から重荷をかついで行くよりはお師匠樣のやうに樂な身になりたいと思ふのはよいことと思いました。それは一面向上心の發露だからです。然乍ら、それかと云つて、現在の師匠を出し拔いて自分が之に代るのはよい事でない。だからたとい向上の心があるからとて、現在のつとめを拔きにしては本當の考へでない。やはり最後のお弟子のやうになるのが本當だと思いました。」

土屋「成る程、此の見方もふるつてゐるつまりあなたは此の話の一切を善意に見たのですね。それも たゞ單に之を善意に見たのみでなく、一々之を批判しながら善意に見て行かれたと云ふところに、一つの特長がある。次に黑宮さんあなたはいかゞです。」

黑宮「……」

答へなし。無理に願ふのもいかぬので、

「では秀夫さん、あなたは、……」

渡部「私は人の荷物なんか持つのはきらいでした。然し近頃は必ずしもさうではありません。近頃はよく人の荷物も喜んで持つて行くやうになりました。でもそれは自分より目上の人の荷物です。まだ自分より目下と思はれる人の荷物はもてません。」

土屋「すると今のところ、此のお弟子のやうなところにありますね。」一同大笑い。吾々もさうだと云ふ感じである。

土屋「行基寺さん、序にあなたの御考へも聞かして下さい。」

行基寺「私はそれを一つの教訓として聞きました。つまり此の話は單なる一つの話ではなく、かくして多くの人に、一人の作者が之によつて、その人々を教訓するのだと云ふことです。」

土屋「之も亦一つの異つた見方ですね。今までの多くの人達は此の話を或はお弟子の方から見るか、或は師匠の方から見るか、それでなければ世間一般の人情から見るかでありました。然に行基寺さんは作者の方から教訓として見られました。世に釋尊の説法はたゞ一音にすぎないが聞く人によつて色々に感ずるものです。思へば僅に單なる一譬喩が斯くも聞く人によつて色々に感せられるものかと驚かされます。」

「崇德寺さま、あなたはいかゞです。」

崇德寺「私もやはり人間には義務がある。だから各々その分に應じてその責任を果すべきだと感じました。」

土屋「つまり、それをそのお弟子が自覺したと云ふのですね。」

崇德寺「先づそんなものです。……」

土屋「孝祐さんあなたはどうです。」

孝祐「私もやはりその義務を各々はたすべきだと云ふことを教へたものだと感じました。」

四

土屋「では最後に私の所感も聞いて頂きます。詳しく言へは色々の方面から批評もし、又それについての感想もありますが、私は此の譬喩を私への教訓として讀みました。その時に私に感じたことは「此のお弟子の心はそつくり私の心である。」と思いました。「自分もさうだが、又多くの人々も之と同じではないか」人は各々自分の立場と云ふものがある。そしてその各々が自分の立場に落ちつかないと、どうしても自分の心がぎこちない。だから各自は、此のお弟子のやうに、最後は自分の落ちつく所へと落ついてたとい荷物は少々重くても之を辛抱して師匠の後をついて行くべきだと私はそれを私の生活の上に見出しました。」

然しその後私はまた考へました。

「此の話は考へれば考へる程、實に意味深いものを藏してゐる。第一に比丘の弟子に對するその態度がいかにもやさしくて又無理がない。殆どすべてがその弟子の願ふまゝを如實に實現させてゐる。そこに何等のこだはりもない。而もそれによつて、弟子は又弟子自身の反省の中に自己の行くべき眞實の道を知らしめてゐる。これこそ如來の心であると思はれた。そして私は思つた、否現に此の大自然の働きが私共に對するそれでないかと。かくて私は此の老比丘を通して新に大自然を見るやうな感に打たれてゐた。

「加之、尚此の外に私の一つの感じが私の心の一隅に浮んでゐた。それはお弟子の重荷に對して、それを自分の負ふべき義務の重荷と見たことである。義務と云ふのは人間としての親に對し、子に對し妻に對するの一家の義務である。又見やうによつては此の國家に對し社會に對する一つの義務と云つてもよい。そこに至ると從來の佛教の正僧の生活は少くとも高僧沙門の相として國家を捨て、社會を棄て、夫婦親子の關係を斷ち切つた相であり、そこには三界の大導師として實に立派な姿にも見えるる。所謂國が滅びても人類が滅しても、それが大自然の成行きなればいたし方がない、之が出家沙門の生活であり、習風である。そこには一切を超越して、世間の生活と沒交歩である。所謂聖者の生活と云ふものがそれである。

五

「ところで、その重荷と云ふのは私は之を在家生活の重荷と見た。いかに信仰に入つたからとて、在家生活と云ふものは可なりに面白いこともある。その代り、そこには又出家生活に比べて非常につら

いものがある。今此の譬喩經に於て、比丘は出家であり、沙彌は在家である。今此の在家の弟子は一家の重荷を負ふて聖者の跡をついて行く、在家乍にして聖者の跡を追ふと云ふことは仲々につらいことである。そこに彼は寧ろ此の一家の關係を斷ち切つて出家の身となり、山に入つて獨り聖者の跡を慕はふと願つたのも無理がない。

「乍然その聖者の跡を慕い乍らも、自分には尙一家に對する義務があり、妻子に對する務めがある。此の事を思ふとき彼れは自分一人が出家して山に入り、淸淨處を願ふて靜安の地に聖者の生活をすることは何となく心が痛む。その結果が再び彼が聖僧の位を去つて、沙彌の生活から在家の生活に歸つた所以である。

「けれどもが、再び在家に歸つても、やつぱり聖道を願ふ彼の本心はどうしても在家生活のわづらはしさを去ることができないので、再び家を捨てゝ沙門の生活となり、獨身の生活に歸つて、その重荷をおろさうとした。

「然し、又も出家して見たものゝ、妻を思い子を思ふ彼の心は人として、必ずしも惡い事ではなかつた。於茲、彼は三度在家に歸つて、一家の一員として、一家の義務を擔ひ、而もその中にゐて、聖者の跡を追ふことを忘れ無かつた。いかなる重荷もこんどこそは心から覺悟して之を擔い、專心道を求めて、聖者の後をついて行くこととなつたのである。

「私は人生をかう考へたとき、それが本當の人生でないかとさへ考へた。そして、またそれが、私自身の今日の生活である。妻あり、子ある私には一家の一員として私には私としての爲すべきつとめがある。而もその責任は可なりに私としての重荷でないとは云へぬ。理想を云へははてしなきこと乍ら一家を捨てゝ、妻子を顧みず、一身を山に退れて沙門の生活をすることは或は之等の重荷をまぬかれる出家の道かも知れぬ。」

「乍然凡そ人類の生活として、之等の出家が果して、眞實の生活であらうか、そしてまた、それが果して、一切の人類の生活の惱みを絶滅し得るの道であらうか。妻を思い子を思ふ、それが何故に聖道の眞義と離れるであらう。如來の大道は寧ろその妻を思い、子を思ふて、そこに妻に對する夫として、子に對する親としての行をこそ、本當の道ではないか。」

「乍然凡夫の生活には必ずしもさう云ふ立派な生活のみではない。そこには確に十惡五逆の煩惱の重荷にもある。だからこそ、それが私共には一種の重荷とも感ずるのである。けれども私は此の重荷を重荷と知り乍ら、而もそれを自分の義務として强く擔ひ、而もその中から聖者の道をたどつて行く、佛子の生活こそ本當の私共の生活だと覺悟した。」

（一九三二、三、二六追記）

人生の眞意義（其の二）

（宗教と人生）

土屋觀道述
安田恢順記

目次—三種の生活の中、動物的生活に就て、—一、自己保存、—二、種族保存—男女關係と親子關係、—佛敎の五慾について、—食、色、睡眠、名譽、財—五慾について新しい見方、—五慾も程度によること、—何の爲めの五慾か、食慾の必要なること、—色欲の神聖、—現代の青年、

されば動物的生活とは

いかなる生活を云ふのでありませう。之を一言にして云へば彼のスフインクスが人面であつて獸身である樣に、身は人間であつてもその仕業が動物的であることを云ふのであります。

私は前に人類の根本要求として、不死と向上の二方面があることを述べました。然にその不死と向上との要求が無意識の中にもあらゆる動物の生活にあることを認めました。その中でも生物進化の法則として、私共に特に

著しく感ずるのは自然淘汰と雌雄淘汰の二つであります。而もその中に最も強く働いてゐるものは食と性との問題でありませう。而て、それは自己の生命を維持し、子孫の繁榮を來たすには此の二つがなくてはならないからであります。從つて前者は自己を保存し、後者は種族を保存するになくてはならないものであるからであります。

或る人は食と性とのことを云ふと卑いことのやうに誤解する人もあります。殊にそれは少しでも修養ある人、若は修養を毎にする人にして此の傾向が多いのでありますが、之は多くの動物がそれのことのみに一生懸命であり、それの爲めには殆ど義理も人情も顧みぬと云ふほどに露骨であります爲めに、始終昔から鬪爭が絶えなかつた爲めに、之を口にすることを自ら差控えるのを以つて道とするやうに慣はされた結果であります。乍然その實はそれ位あらゆる動物には此の食と性との事が强烈なものでありますと同時に、又一面には最も注意深く反省すべき點も多いかと思ふのであります。處で、多くの動物の生活を眺めて見ますと。

先づ第一が自己保存

であります。それには食ふことが大切である。恐くは生物の中に食ふと云ふことは最も大切な中の一つでありませう。世間でも、もう食ふことができぬとあればそれではもう生きれないなあと思ふ位です。乍然自己保存と云ふことは必ずしも食のみによつてつながれるものではなく、食は寧ろその一端にすぎないかとも思へるものは、食なくしては人は生きるものではありませんが、食以外に外敵に負けないやう、又襲はれないやうとの色々の設備が非常に必要な場合があります。その意味から云へば弱肉强食、生存競爭の外に相互扶助も必要であり、食物の外に衣物や住いも大切なこととなり、其の他經濟關係や智識の程度なども大いに關係することは衆知のことでありませう。乍然それらの事柄も之を詮じつむれば殆どすべてが自己の生命を保持し、自己の生活を安定ならしめやうとすることがその主なる原因であります。

次に第二は種族保存でありますが、之も亦動物通有の性質であります。而て、その根本となるものは性の滿足、異性へのあこがれでありますが、それの延長が親子の問題となつて行くことも自然でありませう。從つて、人類の生活には此の性の問題と親子の關係とは離るべからざる深き關係を持つのでありますが、あらゆる動物の生活の中にも之ばかりは前の食物の關係と等しく忘るゝことのできぬものとなつて居ります。

然は私達は此の二つの問題をどう扱つて行つたらよいものであらうか。そこに私達の考ふべき大きな問題が横つてゐるのではないかと思ふのであります。少くとも人間が否一切の動物が此の世に生活して行く限り、どうしても必要にして缺くことのできないものは此の食と性との二つであり、更にそれが具對化すれば自己の保存と種族の保存であります。而て種族の保存には男女の關係があり、親子の關係がある。

自己の保存は生命の尊重となり、自己の自由となり、自己の防衛となり、生存權の要求となり、自己の發展となり、延いてはまた他人への共調ともなり、鬪爭ともなるが、併せてまた、他人への横暴ともなり、へつらひともなり、卑屈ともなるものであります。男女の關係はよい意味から云へば愛情ともなり、融合ともなり、戀愛の神聖ともなるが、それと同時に占有ともなり、略奪ともなりしつとともなるのであります。親子の關係も亦深く考へれば殆ど神佛の心にも勝る至情のあふれとして人情の極致を美化するものでありますが、それだけ他のものに對しては他を害するものも無いとは限りません。

佛敎の五慾

と云ふのは卽ち此のことを戒めたものであります。五慾とは食慾、色慾、睡眠慾、名慾、財慾の五つを云ふのでありますが佛敎では總して之を禁じてゐるのであります。今日の私共から考へれば人間としての存在を許す限り、此の五慾と云ふものは或る程度までは無くてはならぬものであり、又あつてもよいことだと思ふのでありますが。佛敎の理想は佛陀の生活を理想とするのでありますから、普通の人間が五慾の爲めに沒頭して、人生の眞意義に目醒めない點から云へは之を禁じたのも止なを得ないと思ふのであります。乍然それも食慾までも禁じないところを見ると佛陀の生活にも絶對に食慾を禁じたと云ふわけではありません。其の他、在家の生活には男女の關係も、名譽も財產も之を許してゐる位でありますから、睡眠を禁じたと云ふこともないのであります。其の他、佛敎の進歩が大乘の佛敎となり、在家の佛敎をも尊重するに至りましてはもとより此の五慾を嚴禁するやうなことも無くなつたやうであります。乍然いくらそれらを許したからとて、五慾そのものをよいとして、之に沒頭することを賞揚したのではありません。

然らば現代の私共は此の宗敎を信ずる點に於て今後此の五慾をどう見たらよいであらうか、そこに私共の實際生活が深く反省せらるべきかと思ふのであります。

第一に食ふと云ふこと

之は人間として生きて行くと云ふ上にはどうしてもなくてはならぬ事かと思ふ。少くとも今日の社會ではまだ食ふことなしには生きてゐられないのが實際である。して見ると私共がそれの爲めに食のことを考へるのは今日の場合寧ろ當然であつて、そのことを考へないと云ふことが寧ろ罪惡ではないか。要はたゞ之を貪ることによつて、程度以上を越えることにある。然ばその程度とはどの程度を云ふのであらふか、食の程度にも色々の程度がある。昔の佛教では之を生きるの程度としてある。乍然その生きる程度としても、生々として生きる程度もあり、やつと生きられるの程度もあり、大いに活動のできる程度もある。又御馳走を食ふと云ふことを非常に悪いことのやうに考へてゐる人もあるが若しそれが人にも害を與えず、自分にも害とならぬものならば或る程度の美味を喜ぶと云ふことは必ずしも罪惡とは云へぬではないか。否、罪惡どころか、今日の社會生活としては寧ろ一般民衆として之を樂しむことを以つて社會の理想としなければなるまい。

第二に色慾のこと

之も亦、多くの人々は之を語ることを謹まねばならぬとし、之を禁ずることを以つてよいことのやうに考へてゐるものが多いが、正しく性慾の社會的意義を考へたとて、それは必ずしも嚴禁すべきものではない。何となればそれなくては今日の社會は到底維持されないからであります。尤もどんなに之を嚴禁しましても、法律で禁ずるとか、或は之を犯すものは死刑にでも所すると云ふとでない限り、到底それを止め得るものでないから、之を嚴禁してもそれを守る人がないから大丈夫と云ふ人もあるかも知れませんが、私共は或る意味に於て之を是認し、寧ろ之を善用して、性の神聖を高潮したいと思ふものであります。それは何故かと申しますと、此の性慾があればこそ私共の子孫もあり、また、多くの人類も生存するのであつて、之を正しき意味に意義つけることは性の尊さを一層に尊くすることができるからであります。從つて性の罪惡はそれの惡用にあると云はねばなりません。

性の惡用とは性慾の爲めに眞實の生活を誤る行爲を云ふのであります。たとへばそれの爲めに一身の健康を害し、或は一家の親和を妨げ、或は社會の風矯を亂すが如きことを云ふのであります。之に反して、性慾の反省は人類進歩社會の發達の上に重大なる意義をもつものとして之を尊重し考究すべきであります。

だから、古來、我が國でも何かよい事でもあれば御馳走をこしらへて之をふるもうのであり、人が歳頃になれば必ず異性を求めて結婚することを視はないものはありません。乍然

今日の現狀

は果してそこまで充分に理解せられてゐるでありませうか。或はたゞ、單にそれが動物の生活として、各人に喜ばれ、食と性との目的を忘れて。反つてその目的を疎害するものがあるひはないかを恐るゝものであります。一例を擧ぐれば食の問題でも、多くは健康の爲めの食を忘れて不健康なる美食にふける傾きがありはしないか。その證據には今日のやうな生活難の中にも尙食い過ぎて反つてそれの爲めに病氣してゐると云ふ人が多いやうである。その他近頃の青年男女が多くの性を語るのを見ると、それが反つて、一つの享樂の材料とならうとしてゐる。夫婦の眞情性慾の神聖などそれは修養ある宗教家の說教にすぎずして、ともすればそれを凡夫の常として亂倫を極め、それでなければ性の自由を主張してむしろコーセイの代りにする。性の享樂とはそのことを云ふのであらう。そこには今や道德の觀念さへ拔きにしやうとしてゐるのであります。之れはあらゆる人類の衰亡と絕滅とが近づいて來るのではあるまいか。吾々は之を根底から改造しなければならぬと思ふのであります。

（一九二二、四、一再校）

お淨土はあるでせうか

A「今日は一つ、久々のことでありますから、皆に代つて私から質問をさして頂きたいと思いますが許して頂けませうか。」

B「何なりと御尋ね下さい。私で判ることなら何でも御答へいたします。」

A「多くの人は今頃死んでから地獄だの極樂だのさう云ふとろは無いと云ふのですが、本當に無いものでせうか。」

B「死後のことはたゞあるとか無いとか、信ずるより外に仕やうがありません。乍然今日は「たゞよき人の教へを信ずる外に仕やうがない」と云ふやうな云い方では仲々信ぜられるものではありますまい。それはそれ

土屋觀道

だけ、此の世の中が人の云ふことだけでは信ぜられないほどに考へが變つたからであります。」

A「それではどうすればそれが判るでせうか。」

B「やはり、宗教も一つの體驗です。だから、之こそ地獄とか、極樂と云ふものを深く信ずることのできる一つの體驗を要するかと思います。」

A「あなたはそれを體驗してゐられますか。」

B「體驗したかと云はれますと、一寸返答に困ります。何故かと云へばそれによつて、地獄や極樂と云ふものが一つの誤まられた實在論に陷るからであります。乍然、然らば君は地獄も極樂も無いものかと云はれますと、無いところか、今現に私共はそれを日常の生活の上に體驗してゐるのだと云つてやりたいのです。」

A「すると地獄や極樂はやはりあることになりますね。」

B「あるどころか、現に此の世からあると云いたいのです。」

A「然ばそれをどうして知ることができるものでせうか。」

B「確實に云へば各自が體驗するより外に道はありません。乍然釋迦や孔子、クリストの如き偉人の生活を深く研究すれば彼等の信仰生活の上には明にそれが判りと見えてゐたと云ふことが伺はれるのであります。そしてまた、私共の日常の生活を深く反省すればやはり私共の生活の奥深いところには我知らず、地獄を厭ひ極樂を願はずには生きて行かれね本能が働いてゐるやうであります。」

A「それはどう云ふ意味でせうか。」

B「簡短に云へば不死の要求であり、どこまでも死にたくない生きて行きたいと云ふ要求はつまるところ、不死の世界に行きつかねば落つかぬのであります。その落つく世界は永生不死の世界であり、自由平和の常恒の世界であります。かうした願いが滿足のできる世界が宗教の極樂であり、之に反して苦惱の世界が即ち地獄の世界であります。」

C「すると、地獄や極樂は未來にあり、極樂は西方の彼方、十萬億の向ふにあると言はれることは僞でせうか。」

B「全々僞とは申されません。此の世さへある位だから未來もあると考へるのは間違いではありますまい。又此の土にさへあると云ふのだから、十萬億の彼土にもあることでせう。」

A「でも此の世は娑婆で、死ねば地獄か極樂かに往くと說くのが從來の佛教ではありませんか。」

B「今の佛教だつて、それを全々說かぬのではありません、私などもそれを全々否定するのではないのです。乍然今までの多くの人々は地獄や極樂はたゞ之死後のみのことで此の世のことではないと考へてゐる人が多いやうです。又多くの人は淨土教と云ふものは死後のことのみを說いて此の世のことは全く說くものでないかのやうに誤まられてゐるのが今までの淨土教でありました。だから私共はその誤りの點を正して、眞實の淨土を此の世から現はさうと考へてゐる一人であります。」

A「淨土や地獄を此の世に現はすことが出來るのでせうか。」

B「それは出來ますよ。極樂の方は一寸困難いのですが地獄の方は寧ろ容易です。乍然極樂の方だつても、私共が本當の念佛が出來さへすればそれは容易いことであります。それは恰も玉を磨くやうなもので、本當の玉でさへあれば磨けば玉の光りは顯はれるやうに、人の佛性も磨きさへすればそこには限りなき光を放つものです。人格の光とはそれのことです。而もその光の輝くところ、それが如來の光明土であり、淨淨土あり、又極樂の地でないところはありません。從つて地獄と云い、極樂と云い要するに此の外にはないものです。」

A「すると念佛して淨土に往生のできると云ふのはどう云ふ意味でせうか。」

B「それは念佛すると云ふことによつて、如來の光明の中に攝取せられて、永劫不死の生活に入り、常劫の平和の中に安住することができると云ふ意味です。詳しく言へば純粹淨土への往生と云ふことは生身の躰のある間は仲々煩悶と云ふものがさう容易に無くなるものではないのですから、例令、此の世で佛となつた人でも之を有餘涅槃つて、此の身を終つてから初めて無餘の涅槃に入るものだと云ふ位ですから、普通一般の凡夫の生活にはたとい本當の信仰に入つたからとて、さう急に大偉人や大宗教家のやうになれるものではありません。乍然眞に自らの罪深きことを悔いて、心から如來の大悲に合掌して、念佛すれば如來の大願業力によつて、念佛するものは此の世から、未來永劫に如來の光明の中に攝取せられて、生かされて往くと云ふのであります。」

A「すると阿彌陀佛はどこにゐられますか。」

B「どこにもゐられます。」

A「西方の極樂にと云ふではありませんか。」

B「私も初めはさう信じて居りました。乍然その後信仰に入つてからは必ずしも西方ばかりではない。天地到

るところ、如來の在しまさぬところはないと信ぜられるやうになりました。法然上人なども、御歌の中に月かけの到らぬ里はないと申されて居ります。」

A「すると極樂はどこにもありませうか。」

B「どこにもあります。たとい私共に地獄と思つてゐるところでも、念佛を申して見ると、そこが直に淨土が現はれて來るのであります。普通は之を如來の光明と申して居りますが、その光明の輝くところの外に別に極樂があるわけではありません。」

（一九三二、三、二十九）

眞生同盟支部通信

東京眞生座談會報告

三月廿五日夜深川區永代二丁目都築樣方にて開催、來會者拾數名

一、一同して御念佛

二、入信の御感想

青木繁樣

私は入信前或る婦人に戀し惱み、この苦しさを忘れる爲に酒などあふりましたが、闇へは深くなるばかり、果ては物質的にも困窮する樣な有樣になりました。

友人谷口君より神谷善之進樣を紹介されその御好意により信州唐澤山の御別時に參列さして戴きました。

御別時に列らなると土屋上人の御顏に威壓を感じ恐しい樣な氣持でした。

御講話をきゝ御念佛をいたして居りますが初めは色々な雜念が起きて御念佛が無意味に思はれて仕方がありませんでしたが、二時間程續けて居りますと、おぼろげ乍ら佛さはこう云ふものか如來さは斯樣かさ判る樣な氣もし色々煩悶も消えて來て、自分の求め居たものはあまりにも小さく、自分の使命はこんなことではならないさ悟る樣になりました。上人に戀愛生活藝術生活等色々質問し惱みを解決致しました。そして正しき信念を得て確心ある生活を送れる樣に、なりました。

片岡憲三樣

私は眞宗信仰の家に生れまして幼時信仰の篤い祖母に育てられ、朝夕の勤行を見、宗教的な御話をきゝて眠る樣な日を送りました。

中學校に在學中は僧侶の說教が馬鹿らしく眞宗の說きかたに、反對をもち從つて朝夕の御勤行にも反抗的な態度でありました。

しかし乍らこの反面人生について眞劍に考へさせられましてよく人なき海岸などへ出て思索に耽る日が多く御座いました。

中學を卒業し長崎の高等商業に轉する頃は、宇宙には何かしら大きな力が存在して、人間はこれに翻弄されて居る樣にしか考へられませんでした。

卒業の春に日蓮宗の「白熱」と云ふ雜誌を讀んで居るうちに、急に靈感を受けて自分の宗教的視野が開けるのを感じ喜びに堪えませんでした。

吾々は御佛の御惠みによつて生かされて居る、この喜びを、わかつ仕事をしなければならないと考へまして、宗教にならんと致しました。

しかし經濟事情を忘却して教えを說くことは誤りであることを考へ、京都大學の經濟科に入學致しました。そして大谷大學にも籍を置き專門的に宗教學を研究せんと致しましたが、これは手續が面倒で實現出來ませんでした。

長崎に居る頃より心のあふ友人達とグループを造り人生問題に就いて研究を致して居りました。この中に、南、本田君など眞生會に關係ある友人あり、大正十四年の春、南君の紹介によつて、大阪で土屋上人に面會し道友の一人となりました。別に改めて信仰が變つたと云ふのではありませんが、今迄自分の考へて居つた、今までの考へが整理され、系統化をうけて確心ある信仰となり、今日に至つて居ります。

三、報告　神谷氏說明

イ、土屋上人著述刊行に就いて說明

越後の原渡邊兩氏が中心になり昨夏唐澤山に於ける、御講話を內容は實質本位にし、多くの人達に讀み得る樣價も廉くと云ふ趣旨の下に、刊行されることになりました。實費一册五十錢未知の御道友にも御わかち下さる樣御盡力願ひます。

ロ、大屋安一樣先日御火災に會ひましたが幸ひ火元でなく、多くの家財は持出すことも出來、保檢金も下がり、不幸中の幸ひを得たとのこと、都築、神谷兩氏御見舞申上げました、見舞金壹圓贈呈

ハ、宮下くら子樣、御病氣にて御鄕里に歸省なさいました、大分御快方の由御見舞差上げました。

四、土屋上人の御話

二月四日以後、越後、大阪、名古屋各地に參りましたが御承知の樣に村瀨銀行が戶をしめ、引つゞき明治銀行が二月四日に閉鎖してから、四日市銀行も戶をしめる等、この金融恐慌に各地共大困難に當面して居ります。然に我が眞生會員がある道友には不思議さ、この恐慌の慘よりまぬがれて居る方が多いので有升。

二月四日明治銀行が閉鎖したについていつもの月は五日が支排日である爲五日朝銀行より豫金を引出すのが慣例になつて居つた人が今月にがぎつて、何の氣なしに三日に預けた金までも、四日朝に引出して難をまぬがれた人もあります。又閉鎖にあつても、この難局を切拔く爲に支拂に全力をあげて、得意先の信用を強め反つて事業全體を有利に展開した家もあります。普通なれば絕望し煩悶したであらう人が信仰に這入つてた爲に雄々しくもこの恐慌の波を乘越えて居るのであります。

今後の日本の經濟事情は決して樂觀を許しません、しかし之を悲觀せず、難局を突破する確心を持たればなりません。

新潟縣柏崎眞生會通信

□越後柏崎眞生會では今度左のやうな貯金制度が創設せられた。各地道友の參考として大に學ぶ所ありと思いますが載せさせて頂きます。

一、柏崎貯金部創設趣意書

○お互樣に、眞生を獲ようせば、心懸け

て居りましても、朝に、夕に雑念の錆はなかなかに、こびりつくばかりで、どうにもなりません、こびりつくばかりで、どうしても、居られません。

○夫れで、我々道友には、幸ひに、眞生道場があり、例會もあり、毎年唐澤山に大清水に、其他各地方に、專心修養の出來る、精神的の洗練を、受けられる機會が、與へられて、あるのであります。

○これは、御同樣、至幸に惠まれて居る事だと、同慶に堪へませんが、さて、其機會に望みましても、世相の習として、色々複雜な、交渉や、又變遷等、四圍の事情は、支障勝ちでありまして、乍思も躊躇悛巡して、遂に、機を逸する遺憾さは、たびたびに、味はされるのであり升。

○夫れを、幾分でも、各自の心裡に眠れる意識を喚起させて、例會にも、御別時にも、參加が出來るような、微妙な、思案方法はと、氣附きました結果、其場合の用途として零細な、尤も苦痛のない、輕い、積金をして置く事が、行ひ易く、爲し易いように、思はれましたので、茲に、提案して、道友御兄姉方の、御同意を得たいと存じます。

○元より、强て、御勸め申上げる筋合のものでもなく又、御還境によりまして、入會脱退、凡て、御意志の御自由に、御任せするのであります。

○會務等も、凡而、眞生合掌主旨で、處務をさせて頂きますので、同志の方は、決して、御遠慮なく、御相談を打解けてして頂くように、御願致します。

一應發起の意志を、繕言致して置きます次第であります。

以上柏崎眞生會積金部有志

誌代拂込者並寄贈者御芳名

○壹圓宛　大阪島田文吉樣△柏崎村山みれ樣、小林いく樣△岐阜日比東樣、卷淵藤吉樣、中村利平樣、原長一郎樣△三重恒川藁一樣、吉田富太郎樣△愛知三浦喜一樣△尼崎田中彌一郎樣△東京中尾とり樣、宮下くら樣○貳圓　柏崎内山政之助樣○五拾圓宛　大垣和田清兵衛樣、佐藤秀夫樣△國府津島田利三郎樣△東京高橋藤了樣○五拾圓　柏崎原吉郎樣○貳圓　岡村常一樣○壹圓宛　東京小林千代樣△濱田佐々木つる代樣△岐阜口新太郎樣△和歌山吉田忠次樣○五圓　岐阜古川仲右衛門樣

正誤　三月號中本欄柏崎後藤萩次郎樣とあるは小熊啓太郎樣の誤りに付訂正致し升

本誌定價

一部金十錢郵税共
半年金六十錢同
一ケ年金一圓同

注意

◈讀希望者は代金を添へて御申込下さい。
◈誌代は總て前金御拂込の事
◈送金は振替によるのが便利です。

昭和七年四月十日印刷納本
昭和七年四月十二日發行
東京市芝區芝公園十四號地九番
發行兼編輯人　土屋觀道
東京市外淀谷町中通二ノ四二
印刷人　副島愼夫
東京市外淀谷町中通二ノ四二
印刷所　丹丘舍印刷所
電話青山七九二番
東京市芝區芝公園十四號地九番
發行所　眞生社
振替口座東京四七二八八番

（大正十四年八月十三日第三種郵便物認可）　昭和七年四月十日印刷納本　昭和七年四月十二日發行　（毎月一回十二日發行）　第十一卷第四號